

警察国家アメリカ

August 5, 2014

渡辺 久義

(このエッセーは7月14日に書いて世界日報に送ったものだが、掲載される前に7月17日のウクライナでのマレーシア旅客機墜落事件が起こってしまった。読者には、この事件の後でこれに触れないのは不自然に思われるであろうから、これを取り下げることにした。この事件の真相は、すかさずロシアを犯人とした一般メディアの報道とは正反対であり、むしろメディアの本質を知る上で良い機会になった。これはあの悲劇からほぼ20日を経過した現時点で、確信をもって言える。——2014年8月5日)

私が日課のように、ほとんど毎日開けてみるインターネット・サイトが二つある。一つは GeoengineeringWatch、もう一つは Russia Today (RT) である。テレビでも新聞でもほとんど報道しないことを、主としてこの二つのソースから学び、そのいくつかを翻訳して私たちの「創造デザイン学会」サイトに載せている。ここに載っている記事をわずかでも読んでいただくと、私が特別変な考えをもつ者でないことがわかっていただけるだろう。それくらい主流メディアの作りだすこの我々の世界が、隠ぺいに満ちているということである。

例えば、少し前のある翻訳記事の「解説」に、私は「アメリカ軍が最大の攻撃対象としているのはアメリカだ——そんなことは知っていると言う人も、そんなバカなことがあるかと言う人もいるだろう」と書いた。たった今(7月14日)私は、全く同じ趣旨の「アメリカ警察国家に関する10の赤裸々な真実」という題の論文を翻訳したところである。このような不可解なことがなぜ起きているのか? この一つの疑問から、そもそも我々がどういう世界に住んでいたのかが見えてくるはずである。

主流メディアは絶対に言わないが、インターネットの世界ではほとんど当たり前になっていることがいくつかある。その最大のものはいわゆる9・11テロであって、これに関するユーチューブはおそらく何百とあるが、アメリカ政府の説明する通りだと主張するものは皆無に近いだろう。これは *inside job* (内部犯行、自作自演) あるいは最近では、アメリカの常套戦術として *false flag attack* (ニセ旗攻撃) とよく呼ばれる。アメリカのナチス化というべきこの驚くべき現状にしても、9・11にしても、地球がもうすぐ住めなくなるという報告にしても、あまりにも恐ろしく信じたくないことだから、目をつぶって知らぬが仏で行こうとしても、そういうわけにはいかない。地球の運命にかかわるこのようなことは、いつまでも隠しおおせることではない。ガンの告知は進行するほどしづらくなる。メディアはい

つこれを告知するのだろうか？

この四月、欧州評議会前事務総長のヴァルター・シュヴィマー博士が大阪で講演されたとき、私は最初の三分間の挨拶の中で、9・11を正しく捉えていないと、今の世界情勢を理解も分析もできないはずだと言った。そしてそれには霊的観点というものが必要であり、「マタイ伝」13章の毒麦と良い麦のたとえ話が指しているのは、今この2014年のことだと言った。人の話の前にこんなことを言うべきでないかもしれないが、私はこれを言わずにいられなかった。地球規模の毒麦がいま、凶暴なほどに明確に表れてきたとすることができる。これは同時に、我々の内部の毒麦を刈り取って焼くべき時の到来でもある。我々の外部と内部に、(先の論文が言うように)「何らかの激烈な変化が起きなければ」切り抜けることができない、困難な時期に我々はさしかかっていると言することができる。これは何か宗教的な特別の話ではない。これが現今の、目を開けている人たちの間の普通の論調(共通認識)である。

残念ながら我々は、メディアの報道することしか世界では起こっていないと考える。それだけならよいが、誰かが、何か異常な、不気味なことが起こっているというようなことを言うと、一斉に叩かれ、「陰謀論を信ずるバカ」と嘲笑されるような体制になっている。先の論文の著者は、これを「裸の王様」の体制にたとえている――

この王国の人民のように、我々もまた騙されて、もし怖くて言えないような、「何かデンマーク王国では腐っている」というようなことを言うと、我々は、官僚や、企業のトップ、政府のエリート、そして現状維持――少なくともその見かけ――を使命とするメディアの才子に、低能、愚か者といった烙印を押されるのを怖れていた。しかし真理は、皇帝が服を着ていないという事実と同じくらい確実に、我々の顔を覗き込んでいる。

陰謀論の「論」はとっくに取れたが、現在は「陰謀」でさえなくなった。隠さなくなったからである。いま米権力は、ナチスの悪夢を劇場で見ているような、不思議な様相を呈している。何十年もかけて学んだはずの教訓が、全く役に立っていないように見える。彼らはアメリカ全土に市民暴動が起こるのは必至と考え、何年も前からそれに備えてきた――というよりそれを待っている。ひと度きっかけがあれば、たちまち全土が内乱状態になるのは必至と考えられる。もし戒厳令が布かれれば、憲法も基本的人権も一時停止となり、わずかの理由で市民は拘束されたり射殺されたりするだろう。しかしすべての軍隊が一致して行動するとは考えにくい。必ず分裂するであろう。戦う大義名分がないからである。最終的には、凶暴化した「権力エリート」としての少数者と、自由と平和を愛する大多数の民衆の対峙の形になるであろう。そんな非現実的なことが起こるだろうか、と疑問視する人があるかもしれない。しかし今、ウクライナ東部では、現に彼らのアジェンダが実現しつつある。